

## 学術教養センターFD研修会 講演会「1年次教育の現状と課題」報告

学術教養センター 片山智彦

### (1) 研修会の趣旨

近年、大学での1年次教育には、教養教育、専門基礎教育、導入教育、補習教育など様々な役割が期待されている。しかし、1年次教育に対するこれらの多様な期待に大学全体として如何に応えるべきかは、なお今後の検討課題である。今回のFD研修会は、玉川大学の菊池重雄氏による「1年次教育」をテーマとする講演と討論を通じて、教員が授業の技術や方法を学ぶとともに、教職員が1年次教育のあり方について議論し、思索を深めることを目的として実施した。

### (2) 日時・場所

- ・2007年3月6日(火) 13:00~15:30
- ・L208TV講義室(福井)、M208TV講義室(小浜)

### (3) プログラム

開会

挨拶

- ・菊沢正裕教務委員会ファカルティ・ディベロップメント部会長

講演

- ・演題 「1年次教育の可能性-大学における役割」
- ・講師 菊池重雄氏(玉川大学コア・FYE教育センター副センター長)

討論

- ・「1年次教育の現状と課題-教養・専門基礎・リメディアルの交錯-」  
司会 津村文彦講師(学術教養センター)

閉会

### (4) 講演の内容

#### 1) 「1年次教育」の背景と課題

○1年次教育が必要とされる背景には、大学の大量化と大学全入時代の到来により、低学力学生や学習の目的が不鮮明な学生が増加したことがある。

○大学生活や大学での学習を十分に理解していないとされる「大学教育ファースト・ジェネレーション」の学生の増加も、1年次教育が必要とされる理由の一つである。

○多くの学生にとって、大学時代は、高校から大学へ(生徒から学生へ)、大学から社会へ(学生から社会人へ)の移行期にあたり、高校から大学への移行の促進と人生のさまざまな移行期を自力で乗り切れる人間の育成のためのプログラムを確立することが必要である。

○1年次教育には、高等教育への転換教育、専門導入教育、教養教育、リメディアル教育といった様々な面がある。

○入学生の傾向と各大学の社会的役割を踏まえた、それぞれの大学に最もふさわしい1年

次教育プログラムを作りあげることが重要である。

## 2) 1年次教育の展開

○転換教育は、キャリア形成のための準備教育と位置づけるべきである。

○転換教育では、大学の入口を重視し、大学と社会における成功（生存）を教える一年次教育（入口から教えるキャリア教育）を目的とすべきである。

○リメディアル科目は、大学教員の担当能力の問題（高校で教育成果が上がらなかった科目の理解を大学教員が促進できるかという問題）などがあり、一般的には、あまり成果を上げていない。

## 3) 玉川大学の1年次教育

○玉川大学は、21世紀の国際社会に柔軟に対応し、責務を負うことのできる人材の育成を建学の理念としていることから、日本社会と世界に貢献できる人材を養成することが玉川大学の役割だと考え、この理念の下で1年次教育のあり方を考えている。

○玉川大学では、1年次教育を転換教育と位置づけて、高校生から大学生への円滑な移行のための援助、大学生としての学習力の育成、専門知識をもった教養人の養成、学生のアイデンティティの確立を目的とした教育を行っている。

○1年次教育の科目として、全学部の学生を対象とする一年次教育プログラム「一年次セミナー」（春学期・秋学期各必修科目（2単位））を置いている。

○1年次教育の到達目標は、学生としての自覚のある大学生活、自律した社会人の育成、学問の重要性の理解、学習の習慣と技術の習得、学生自身による将来設計、健全な生活習慣の涵養などである。

○玉川大学独自の教科書（玉川大学コア・FYE教育センター編『大学生活ナビ』（2006））を作成し、1年次セミナーで全学共通の教科書として使用している。

○全学をあげて組織的な1年次教育への取組みを行った結果、教職員の危機感の共有、大学改革の方向性の共通理解、教員の意識改革を実現することができた。

## (5) 総括

今回の研修会は、学術教養センターの教員を対象としたのものであったが、1年次教育が大学全体の課題であることから、他部局の教職員に対しても参加の呼びかけを行った。当日は、学術教養センター（9）、経済学部（3）、生物資源学部（3）、情報センター（2）、事務局（2）の計19名の教職員の参加をうることができた。講演後の討論でもさまざまな質問や意見が提起され、1年次教育について多面的に検討する場となったのではないかと考える。

また、研修会のアンケートでは、「1年次教育について考える刺激になった」、「統一した視点・方針を出して教養ゼミをパワーアップしてはどうか」、「専門導入教育の意義を考え直したい」、「FD委員に専門家が必要」といった趣旨のご意見、ご感想をいただき、今後の本学でのFD活動につながる部分もあったのではないかと考えている（アンケートの文面そのままではなく、内容を要約させていただきました）。